

住宅デザインにみる日本らしさの研究

近畿大学大学院総合理工学研究科 渥美 貴之
近畿大学理工学部 久 隆浩

1. はじめに

1-1. 研究の背景と目的

日本の住宅や建築物、まちなみなどは、明治期以降西洋化が進み、日本的な伝統性が希薄になる傾向にある。その典型が和室の減少である。和室の洋室化のように、たしかに一見すれば「日本らしさ」は少なくなっているように映る。ほんとうに、住宅における「日本らしさ」は失われつつあるのだろうか。そのことをあきらかにするために、本稿では現代住宅のデザインを調査し、現代の住宅デザインにかつての伝統的住宅のような「日本らしさ」の手法がとられているかどうかを空間的観点から明らかにすることを目的とする。

1-2. 研究の方法

一言に「日本らしさ」と言っても一体何をもって「日本らしさ」というのが問題である。そこでまず、既往文献より「日本らしさ」や「和」や「日本住宅」についての識者の意見、考えを抽出する。また、それと同時にかつての伝統的住宅についての調査を行なう。そこから、「日本らしさ」について考察を行なう。

次に、住宅雑誌に紹介された1998年～2007年築の住宅を対象として、現代の住宅デザインにどのような「日本らしさ」の手法がとられているかを調査・分析を行う。

2. 「日本らしさ」について

2-1. 加藤周一氏 「日本文化における空間」1)

2-1-1. 境界

「日本らしさ」についての識者の見解として、まずはじめに加藤周一氏の「日本文化における空間」を取り上げる。

日本の宗教的伝統では、空間は閉じていて、「境界」がはっきりしているという。たとえば、「家」において、どこからが家族で、どこからがそうではないのかという範囲が、また、物理的な建物でも「境界」ははっきりしている。「村」においても、その村に住む人と外側から来る人との区別が明確である。また、「家」「村」ともに共通なことの一つは、内側のコミュニケーションが円滑であり広範な情報が交換されているのに対し、外とのコミュニケーションは拙劣でわずかな情報しか発生しないということがある。

2-1-2. 奥

先ほど述べた「家」や「村」などの内側の人同士のコミュニケーションには、構造的に「奥」という概念が関わってくる。内部性、内部化の程度、どのくらい内部なのかの問題であり、内部性が高くなればなるほど「奥」であると表現される。その内部性は、宗教的空間、聖なる空間、私的空間性と関連がある。普通の住宅建築では、「奥」に入れば入るほど、より私的になるということである。例えば、玄関は道と比べるとはるかに私的空間であるが、玄関では挨拶程度しか交わされず、さらに奥に入って客間になれば、もっと私的になる。もっと奥に行くと家族の居住空間になり、よほど親しい人でなければ外側の人は入ってこられない。「奥」に入れば入るほど私的空間であり、プライバシーの度合いが高くなるということである。これは他の国にくらべてより日本の住宅にみられる構造である。

2-1-3. 部分と全体

仏教寺院や京都の碁盤目状構造の町は、直接に中国の洛陽を写したもので対称性が強いのに対して、江戸の大名屋敷、侍屋敷などの平面図はシンメトリー、左右対称のものがない。日本の建築が中国大陸の影響を離れて、日本独自のものになった場合には、このようにシンメトリカルにならない。これは建て増しによって、必要な部屋をどんどん足していったからこのような形になったと考えられる。つまり、日本の伝統的な建築物は部屋単位のもの足していった家にしていくという、部分から全体へ向かう手法である。逆に、ベルサイユ宮殿のように、最初から十字架の形を構想しておき、左右対称の輪郭を作っておいて、それを割って部屋を作るのは、全体から部分へ向かう手法である。中国も同じで、全体から部分へ向かう手法である。そしてそれは、平面図だけの問題ではなく、部屋の中の細部にまで及ぶ。建物の部屋の中の、例えば鴨居とか、襖、さらには襖の取手までに及ぶ。それは建築全体の構想と何ら関係ない。極端な場合だが、桂離宮の書院の襖の取手は、一つ一つデザインが違う。

2-2. 谷崎潤一郎氏 「陰翳礼讃」2)

2-2-1. 京都や奈良の寺院

続いて、谷崎潤一郎氏の「陰翳礼讃」を取り上げる。谷崎は次のように言う。

「私は、京都や奈良の寺院へ行って、昔風の、うすぐらい、そうしてしかも掃除の行き届いた厠へ案内される毎に、つくづく日本建築の有難みを感じる。茶の間もいゝにはいゝけれども、日本の厠は実に精神が安まるように出来ている。それらは必ず母屋から離れて、廊下を伝わって行くのであるが、そのうすぐらい光線の中にうずくまって、ほんのり明るい障子の反射を受けながら瞑想に耽り、または窓外の庭のけしきを眺める気持は、何とも云えない。そうしてそれには或る程度の薄暗さと、徹底的に清潔であることと、蚊の呻りさえ耳につくような静かさが、必須の条件なのである。私はそう云う厠にあって、しとしと降る雨の音を聴くのを好む。(中略)日本の建築の中で、一番風流に出来ているのは厠であるとも云えなくはない。やはりあゝ云う場所は、もやもやとした薄暗がりの光線で包んで、何処から清浄になり、何処から不浄になるとも、けじめを朦朧(もうろう)とぼかして置いた方がよい。」

2-2-2. 建築のこと

「日本人とて暗い部屋よりは明るい部屋を便利としたに違いないが、是非なくあゝなったのもあろう。が、美と云うものは常に生活の実際から発達するもので、暗い部屋に住むことを余儀なくされたわれわれの先祖は、いつしか陰翳のうちに美を発見し、やがては美の目的に添うように陰翳を利用するに至った。事実、日本座敷の美は全く陰翳の濃淡に依って生れているので、それ以外に何も無い。われわれは、それでなくても太陽の光線の這入りにくい座敷の外側へ、土庇を出したり縁側を付けたりして一層日光を遠のける。そして室内へは、庭からの反射が障子を透してほの明るく忍び込むようにする。われわれの座敷の美の要素は、この間接の鈍い光線に外ならない。」

3. かつての伝統的日本住宅③

稲葉和也・中山繁信著の『日本人のすまい-住居と生活の歴史』から伝統的日本住宅の特徴を取り出す。

3-1. 町家

都に建てられた町家は、間口の半分の一間が通りにわの土間で、その奥は、かまどや水がめが置かれる勝手口になっていた。この通りにわは、裏の庭に通じ、そこには近隣所で共有する井戸が掘られていた。

ここで、共有の井戸が掘られているのに、先ほど述べた「外との境界は明確であるのか」という問題に直面する。しかし町家は木戸を設け、それを閉じることにより、まちそのものを一つの境界として、区切ることができる。それにより、町家に住む人が井戸を共有する場合、それ

は「内」と「内」の関係として考えられる。そう考えると、加藤周一氏の考えに当てはまると考えられる。

3-2. 長屋住宅

江戸時代以来庶民のすまいだった長屋は、多少その形式が変化するが、都市の庶民住宅であることに変わりなかった。大正時代になっても都市住宅の1/3はまだ長屋に頼っていた。このころになると、2階建ての長屋も現れ、部屋数も増え、便所もそれぞれの家に設けられるようになったが、逆に過密化して日照も悪くなった。

これも、長屋を1つの区切りとして考えると、同じ長屋を共有している人達の関係は内側の関係であり、別の長屋との交流関係は薄い。ここでも、内側の関係はあいまいだが、外側との関係が明確になっているひとつの例だろう。

4. 日本らしさの考察

ここまで「日本らしさ」に関する識者の意見と伝統的日本住宅の特徴をみてきた。これらをまとめてみると、加藤周一氏の見解では日本文化の特徴として「境界」「奥」「部分と全体」という概念があり、外に対しての空間的境界意識が強いということが挙げられる。内の空間と外の空間をはっきりと区別されているということが、日本の特徴であるといえる。

谷崎潤一郎氏の陰翳礼讃は識者の思う日本らしさ、日本の美について述べており、それが和魂洋才や他の文化の影響によりかつての伝統的な日本文化が薄れていく様子を嘆いている文である。ここで述べた日本の厠、日本座敷について共通に言えることは、物事をはっきり見せない「あいまいさ」である。厠の場合、不浄なものであると思われる空間を薄暗い明かりで照らすことではっきり見せること無く、逆に趣のある空間へと変化させることが日本美につながった。つまり、はっきりした違いで表現するのではなくその違いさえもあいまいにすることが日本らしさであると考えられる。

また、伝統的日本住宅の特徴として、「町家」「長屋住宅」を取り上げたが、その特徴は人と人とのコミュニケーションに関連しているということである。どの例においても、内側の人間同士のコミュニケーションが明確に表れている(町家と長屋は近隣住民を内側同士の関係としている)。つまり、「日本らしさ」はコミュニケーション空間に顕著に表れているといえるのではないだろうか。

5. 現代住宅のデザイン調査

5-1. 調査対象

前章で述べたとおり、住宅における「日本らしさ」はコミュニケーションを促進させる空間にあると仮定を立て

たうえで、「境界」という概念に着目し、住宅雑誌5)に紹介された1998年から2007年築の住宅においてどのようなコミュニケーション空間のデザインがとられているかを調査した。なお、平面図や立面図などの重要情報が記載されていない住宅は調査の対象外とした。

5-2. 現代住宅のコミュニティパターンの分類

調査の結果、現代における住宅内の境界に関するコミュニティパターンとして次の3種類を抽出できた(表-1参照)。それぞれについての特徴と事例を紹介する。

表-1 現代住宅におけるコミュニティパターン

I. 見え隠れ型	
モデル図	事例図
II. 共有空間型	
モデル図	事例図
III. 境界曖昧型	
モデル図	事例図

5-2-1. 見え隠れ型

これは、平面的/断面的にあえてズレを造ることで、空間的には一体の空間ではあるが、そこに気配は感じつつも見通せない隅部を出現させる手法である。また、スキマを造ることによって、視線は近くとも行くには遠い地点など、人と人との間に微妙な間合いをうみだすことができる。(図-1参照)

5-2-2. 共有空間型

これは二世帯住宅によくみられるデザインで、室自体は親世代と子世代で独立した住宅になっているが、その境界を共有通路にしていつでも行き来できるようにした

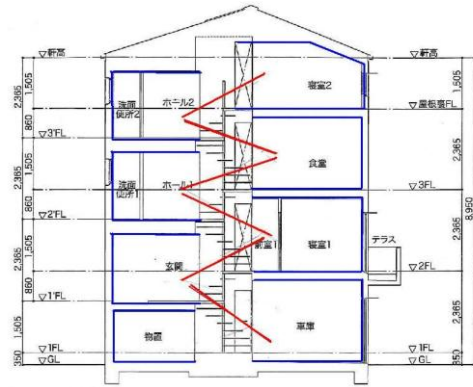


図-1 「浅草の家」堀部安嗣、松本美奈4)

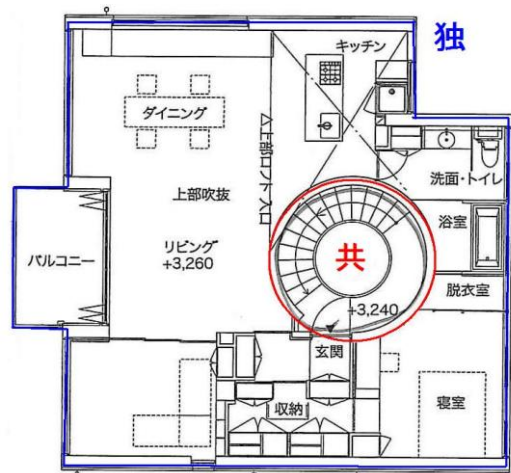
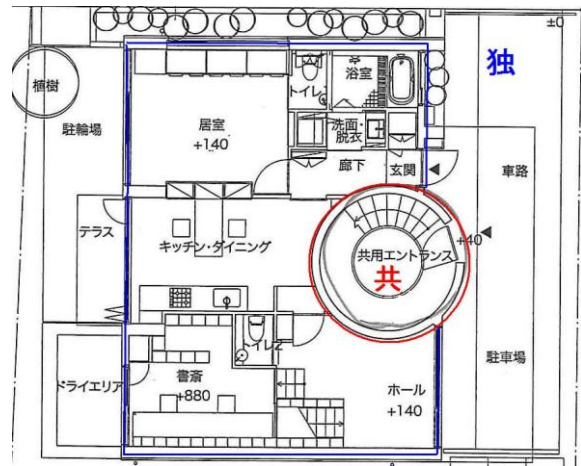


図-2 上:1階平面図 下:2階平面図
「高井戸の家」:谷内田章夫4)

デザインである。近くにありながらそれぞれが独立していることで、家族内外の距離を意識によってコントロールできる。(図-2参照)

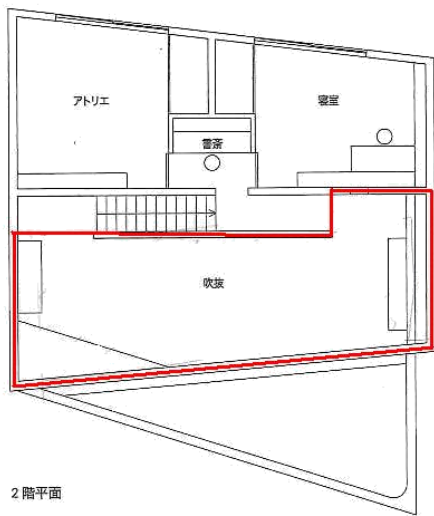
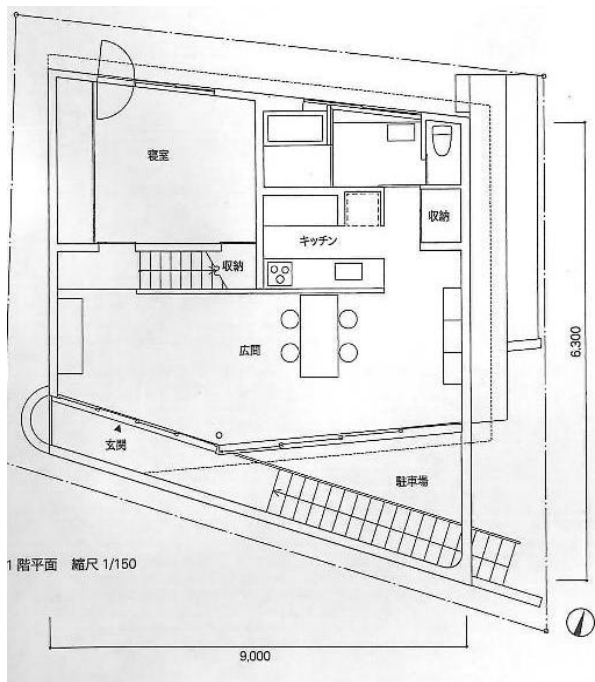


図-3 上：1階平面図 下：2階平面図
「鎌谷町の家」：安田幸一、北田明治4)

5-2-3. 境界曖昧型

これは主に吹抜により『公』と『私』の境界を曖昧にすることで、私的空間を完全な独立空間とせず、私的空間にいるにも関わらず、声によって他者とコミュニケーションがとれるものである。(図-3参照)

6. まとめと考察

上記の結果より、現代住居におけるコミュニケーションのデザインは、プライバシーを尊重しつつ、他者とのコミュニケーションを図ることに重点が置かれていることがわかった。家族であれ、近隣住民であれ、自分以外の人間は他人であることに変わりはない。まず、コミュニケーションをとるうえでは、人と人との間に何らかの間合いが大切だということ。そしてその間合いは、境界をあいまいにすることで空間に生まれるものである。上記で述べたような、平面的、断面的に空間のズレやスキマを設けたり、視線は近いのに動線は遠かったりと、様々な手法がとられていた。

この、間合いのようなあいまいな空間は、かつての京都の町家にみられた通りにわのような、近隣住民との共有空間を家の裏庭につくる「内」と「外」とのあいまいな境界に良く似ている。

明治維新以降、家族との生活を中心に住宅をつくるようになり、しだいに核家族化していくが、形は違っていてもこのあいまいな境界空間をつくるという手法は現代でも残っているようだ。

しかし、かつての町家住宅や長屋住宅に見られたような、近隣間のコミュニケーションを促進させるように感じることができる住宅デザインは特に見つからなかった。かつての伝統的住宅のように、境界をあいまいにさせるデザインは残っていたものの、近隣間とのコミュニケーション促進デザインも残っているのが今後の課題となるだろう。

参考文献

- 1) 加藤周一(1996)『加藤周一講演集Ⅱ－伝統と現代－』かもがわ出版
- 2) 谷崎潤一郎(1933・1934)「陰翳礼賛」『経済往来』昭和8年12月号・9年1月号、日本評論社
- 3) 稲葉和也・中山繁信(1983)『日本人のすまい－住居と生活の歴史』彰国社
- 4) 『新建築～住宅特集～』1999年～2008年度版、新建築社